僕のヒーローアカデミア:Be ULTRA

マーベルチョコ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＵＬＴＲＡＭＡＮ見て、スマホゲームのＵＬＴＲＡＭＡＮやってたら無性に書きたくなったので書きました。

目次

1．Ｂｅ　ＵＬＴＲＡ ―― 1
2．Ｓ．Ｓ．Ｌ ―― 16
3．雄英高校入学試験 ―― 27
4．ＵＬＴＲＡＭＡＮ　ＳＵＩＴ
39
5．波乱万丈な初日 ―― 48
6．戦闘訓練 ―― 59
7．スペシウム ―― 68
8．悪意の予兆 ―― 80

1．Ｂｅ　ＵＬＴＲＡ

アニメやコミックなどで度々見られる超常現象が現実となった世界。
今ではその超常現象の力を『個性』と名付けられ、社会の一部となった。
そんな社会でも今最も脚光を浴びている職業と言えば『ヒーロー』。
個性を用いて悪を倒し、人々を助ける誰もが憧れる職業である。

○

どこかの山奥に存在している研究所から突然爆発が起こり、炎に包まれる。
何人かが研究所から出て来て避難する中、１人が研究所を出入りして職員助けている。
その人物は全身を赤と銀でカラーリングされて胸の中心に青い光を光らせる機械のスーツを着た男性で光の残像を残す速さで助け出している。
全員を助け出したスーツの男は１組の男女に近づく。
男性は白衣を来て博識そうな男性で足を怪我をして血が流れている。
その男性が必死に手当てをしているのは腹から血を流している女性で顔色が悪く呼

吸も荒い。
「ラフケル！ヒカリの様子は!?」
スーツの男は同じく機械のマスク越しに自身の妻〝ヒカリ〟の容態を診せていた眼鏡をかけた博識そうな男性〝ラフケル〟に切羽詰まった様子で聞く。
「今は無事だがこのままじゃ危ない！急いで病院に運ばないと！」
ラフケルも怪我しているがヒカリの容態を必死に診ていた。
するとその男性が何かを気づいた様子で周りを見る。
「ウルトラマン！子供はどうした!?」
機械のスーツを着た男性〝ウルトラマン〟は悔しそうに叫ぶ。
「見当たらないんだ！子供部屋にもいなかった！僕の感覚でも見つからない！」
「じゃあ、どこに…っ!?」
言葉を続けようとした瞬間研究所からまた大きな爆発が起こり、避難した職員、ウルトラマン達を爆風で包み込む。
すると炎が激しくなる研究所の中からウルトラマンのスーツとよく似ているが黒と血のような赤でカラーリングされた禍々しいスーツを着た男が出てくる。
「バアルッ!!!」
『ウルトラマン！そんなに怒りを露わにしてどうしたんだ？』

黒いスーツの男、バアルは怒りを滲ませるウルトラマンを見て嬉しそうにしながら、挑発するように声をかけた。
「何故ここを襲う!?」
『そんな知れたことを……』
バアルは悪魔の様に尖った指をウルトラマンに向ける。
『お前がいるからだ。お前と俺はそういう運命なんだよッ!!』
そう言って愉快そうに笑うバアルにウルトラマンは更に怒りが募る。
それに気づいたバアルは更に追い討ちをかける。
『お前がいつもより怒っているのは研究所を破壊されたからか?妻を傷付けられたからか?それとも……』
バアルは片手をウルトラマンに見せつける様に挙げた。
『子供を拐われたからか?』
その手には傷つき、気絶している幼い子供が握られていた。
「……っ!!今すぐ放せ!!」
『ふん、ほらよ』
バアルは少年をウルトラマンに向かって放り投げ、素直に解放した。
ウルトラマンは子供に衝撃を与えないように優しく抱き止めるとラフケルのところ

まで退がり、ヒカリの側に寝かせる。
「この子を頼む」
「待て、今の君の体じゃバアルに勝てない。オールマイトには救援を頼んだ。彼が来るまで戦うな」
　ラフケルの提案にウルトラマンは首を横に振って拒否する。
「それまで奴が何もしないという確証がない。それにまだ1人助けていない」
「待て！ウルトラマン！明星(めいせい)!!」
　ラフケルはウルトラマンの本名を叫んで止めようとするがウルトラマンはバアルと対峙しようとする。
　すると気絶していた子供が僅かに気を取り戻し、ウルトラマンに手を伸ばす。
「と…と、おさ……ん」
　息子が伸ばした手を優しくしっかりと握り、マスク越しに慈愛の目を向ける。
「新星(しんせい)、お前を愛している。何があってもだ」
　手を離し、ウルトラマンはバアルと対峙する。
「もう1人はどこにやった？」
『もう1人？俺は知らんなぁ。それよりもだ!!決着を付けるぞ、ウルトラマン!!俺たちの運命にッッ!!』

両手に紫に光る双剣を握り構えるバアルとウルトラマン。
一瞬の静寂が過ぎると両者は一斉に飛び出し、互いの武器と拳をぶつける。
その瞬間、凄まじい衝撃波と光が辺りを包み込んだ。

○

黒煙が立ち込める研究所の周りには多くの警察とヒーローが駆け付けており、事後処理に追われていた。
救急車で手当てを受けているラフケルの側にオールマイトが近づく。
「ラフケル、申し訳なかった。もっと早く駆け付けていれば……」
「向かう途中で敵と戦闘があったんだろう?……その姿を見ればわかる」
オールマイトの体にはいくつかの傷が付いており、戦って救援に遅れたのはわかった。
ラフケルはウルトラマンとバアルが戦った跡に目を向ける。
木々は薙ぎ倒され、山肌が見え所もあった。
更にはいくつかの山が大きく抉れている。
激しい戦いがあったのは誰の目から見ても明らかだった。
「ウルトラマン……明星の行方は?」

「わからない。最後の一撃でバアルごと消えた」
オールマイトの質問にラフケルは気落ちしたように言う。
ウルトラマンは最後の一撃をバアルに向かって放った時に光に包まれバアルと共に消えてしまった。
行方が分からない親友を心配するラフケルに更に追い討ちをかけるような知らせが入る。
「あの、ラフケル・エミューさん。病院から知らせが……明銀　光さんがお亡くなりになりました。お悔やみ申し上げます」
「そんな……」
光の死に深い悲しみに落とされるが、すぐに明星と光の子供である新星の容態を聞き出す。
「息子は!?子供の方はどうした!?」
「お子さんは現在容態が安定して、安静にしております」
「……僕の子供じゃない。親友の子供だ」
ラフケルは悲しみにくれながらも、救えなかった親友達のために自分がするべき事を決心した。

○

ウルトラマン失踪から6年後。

静岡県のとある町で時刻は夕方になっており、買い物している主婦や学校帰りの学生が多く見られる時間帯の中、その人混みを駆け抜ける1人とそれを追いかける一団の姿があった。

「待てやコラァ!」

周りの人達が何事かと走り回る一団に目を向ける。

追いかける一団は制服を激しく着崩した不良達で逃げる1人に向かって叫ぶ。

「しつこいって!!」

追いかけられている少年は不良達に向かって叫ぶが不良達は気にした様子はなく、必死に少年を追いかける。

少年は人混みを避けながら追いつかれないように逃げる。

「おい!アイツ滅茶苦茶足早いぞ!」

「大丈夫だ!このまま行けば……!」

1人の不良が逃げられると思ったが先頭を走る不良が心配ないと言うと、少年の前に不良の仲間達が立ち塞がる。

「げっ、やばっ…!」

少年は咄嗟に横の路地に入るとその先は行き止まりだった。
しまったと思う少年の背後に不良達が息を切らせながら追いつく。
「やっと……追いついたぞ、コラ……はぁ、はぁ」
「し、しつこいなアンタ等も。俺が何をしたって言うんだよ」
「ふざけんな！お前のせいで金取り損ねたじゃねぇかっ!!」
不良達は少年が通う学校や周りの他校の生徒からカツアゲする常習犯で偶々それを見かけた少年が止めに入り阻止したのだが、邪魔された不良たちは少年に怒り追いかけ回していたのだ。
「それはアンタ達が悪い事をしようとしたから俺が止めたんだ」
「なんだ？善人ぶりやがって、ヒーローかっての」
不良の1人が嘲笑い、仲間達もそれにつられて笑い出す。
笑われた少年はそれに臆する事なく一歩前に出る。
「そうだよ、俺はヒーローになりたいんだ」
一切怯まずに見据えてくる少年に不良達は僅かにたじろぐ。
それに気づいた不良達のリーダーが仲間達に叱咤する。
「び、ビビってんじゃねぇーぞ！相手は中坊1人だろうが！囲っちまえばボコれる!!」
叱咤され不良達は少年に近づいていく。

少年は拳を構えて、不良達を睨みつける。
その姿は堂に入っており、不良達は僅かにたじろぐ。
「戦っても良いけど覚悟しろよ」
「う、ぅうおおぉぉぉっ!!」
その言葉に不良達は少年から強者の雰囲気を感じ取るがリーダーが勇気を出して、殴り掛かる。
迫り来る拳を少年は完全に見据え……
「ぐへっ!?」
「え?」
あっさりと殴られて地面に大の字で倒れた。
「弱っ!?あんなに息巻いていたのに!?」
「べ、別に喧嘩が強いとは言ってないし……」
負け惜しみを言う少年に不良達は一斉に襲いかかる。
「ビビらせやがって!」
「何がヒーローになるだ!弱くちゃなれねぇだろ!」
「何だとおま……いてっ!?ちょ、痛いって!」
執拗に少年を蹴りつける不良達に大声が聞こえてきた。

「ヒーロー！こっちで人が襲われてる！早く来て！」
「っ!?ヤバイ！逃げるぞ！」
ヒーローが駆けつけてくると知ると不良達は一斉に少年を置いて逃げ出した。
少年は不良がいなくなったのを確認すると立ち上がって、少し気落ちした様子で体についた汚れをはたき落とす。
「はぁ……」
「まーた厄介事に首を突っ込んだの？」
落ち込む少年に少女が話しかけてくる。
「キョーカ、ありがとう。助かった」
「どういたしまして」
少年を助けたのは耳からプラグが伸びる個性を持つ少女、耳郎　響香。
「で、今回は何したの？シンセー」
そう言ってじろうは少年の名前を呼ぶ。
少年の名前は明銀（みょうぎん）　新星（しんせい）。
６年前の被害にあった少年だった。
新星は困ったように頭をかいて説明する。
「ほら、最近この町の学校がカツアゲの被害にあっているって噂になっていただろう？

たまたまその現場に居合わせてさ」
「それで止めに入ったわけね」
　耳郎は新星の頬に汚れが付いていることに気づき、ハンカチを取り出して拭いてあげる。
「体が頑丈なのは知っているけど、こっちも心配なんだよ」
「ごめん、でも怪我はしていないさ」
　新星の制服は暴力を振るわれたせいで傷ついてはいるが新星自体に傷はない。
「それでもだよ。アンタ、昔から無茶するんだから」
「ははっ、ごめん」
　耳郎の忠告に新星は困ったように苦笑いする。
　汚れを拭き終わり大通りに戻ろうとした時、新星が耳郎を呼び止めた。
「ハンカチ洗って返すよ」
「いいって、幼馴染なんだし遠慮しなくてさ」
　２人は幼馴染で家が近かったが、６年前の事件で新星は両親の親友であったラフケルに引き取られ育てられており隣同士ではなくなってしまったが親交はそれ以来もずっとあった。
　２人は大通りに出て帰路につきながら、今後の進路について話し合う。

「ウチらも今年で3年生じゃん。進路とか決めた？」
「俺は雄英高校を目指すよ。昔からの夢だ」
「そっか、昔から父さんみたいなヒーローになるんだって言ってたしね」
「うん、まぁ……」
　新星は昔のことを思い出し、少し感慨深そうな表情になる。
「キョーカはどうするんだっけ？音楽の方面を目指すのか？」
「……ウチも雄英を目指す」
「え？」
「ウチもヒーローを目指すって言ったの」
　意外そうな表情をする新星に耳郎は聞き返す。
「どうしたの？そんな顔して」
「いや、てっきり音楽関係を目指すと思ってたから」
「まぁ、そっちを目指してるもよかったんだけどね……好きなことで人を救けたいって思ったから。……それにシンセーのこともあるし」
「……」
「どうしたの？黙っちゃって」
「え!?い、いや！何でもない！あっ、そういえばこの間頼まれていたヘッドホンの修理！

終わったよ！」
「う、うん……ありがとう」
耳郎の最後の言葉を個性のせいで聞き取れてしまった新星は恥ずかしさで顔を僅かに赤くして話題を変えた。
その後は新発売するＣＤのことや他愛もない話をして、耳郎の家に着いた。
「じゃあ、また明日ね」
「うん、また明日」
耳郎を見送り、新星も帰路に着こうと踵を返すが歩こうとせず立ち止まる。
「ふぅ……帰るか」
そう言って新星はその場でしゃがみ込んでく跳び上がった。

○

耳郎が家に入ると耳郎の母が出迎えてくれた。
「お帰りなさい。今日は新星君と一緒だったの？」
「ただいま。今日はって何？」
嬉しそうに聞いてくる母親を耳郎はジト目で睨むが母親は楽しそうにクスクスと笑った。

「だって響香、新星君と一緒に帰ってくる日はいつもより楽しそうなんだもの」
そう言われた耳郎は段々と顔を赤くして慌て出す。
「ちょっ！何言ってんの!?そんな訳ないじゃん」
顔を赤くしながらそっぽを向く娘に対して、いつ素直になるのかとキュンキュンしながら期待して、ある事に気付いた。
「少し聞こえたのだけれど、新星くんはここまで来たの？」
「そうだけど」
「でも、新星君のお家ってここから真逆の方向じゃない。相当距離があるわ」
新星の家は学校を挟んで耳郎の家とは真逆の方向で、かなりの距離がある。
勿論耳郎もそのことは知っている。
「それなら問題ないよ。その方が思いっきり動けるだろうし」
「？」
耳郎の言葉に母親は首を傾げたが、耳郎は振り返って玄関越しに、帰ったであろう新星の家の方向を見た。

○

夜の街を飛び跳ねるように移動する影がチラつく。

一飛び一飛びが力強く、踏み込まれた地面にはヒビが入る。
ビルからビルへと飛び移る影の前に一際高い建物が現れ、ぶつかりそうになるがビルの出っ張りに指を掛けて自分の体を引っ張りあげるとビルの屋上まで登った。
足を手摺に引っ掛けて街全体を見渡すのは耳郎と別れた新星。
家までの道をビルを飛び越えて来たのだ。
ビルからビルへと軽々跳躍する脚力、僅かな出っ張りを引っ掛けて体を屋上までなてた引っ張りあげる腕力。
その身体能力は正しく超人。
明銀　新星
個性：超人

これは彼が新星ヒーローウルトラマンを目指す物語だ。

2．　S．S．L

新星はビルの手摺に腰掛け、街の様子を見下ろす。
「ふう」
新星はこうやって個性を思いっきり使った後、高層ビルの屋上から街を見下ろすのが好きだった。
全力で動いた後の開放感は自分が自由になれたと思えるからだ。
勿論ヒーローや警察に見つかれば大目玉を喰らってしまうため、それは見つからないように注意している。
それに新星はただ個性を使いたいから使っているわけではない。
新星の耳に大きなブレーキ音とパトカーのサイレン音が聞こえてくる。
「ん？」
目を向けるとパトカーから1台の車が逃げていた。
逃走車が逃げる先には多くの人がいる。
「やばっ…！」
新星はビルを飛び降り、逃走車の方へと向かう。

逃走車は危険な運転で逃げているとちょうど信号で車道を横断している人混みに突っ込もうとする。
逃げることで気が動転していた逃走犯はブレーキを踏むのを忘れた。
ほとんどの人が車が猛スピードで突っ込んでくるのに気づき、慌てて歩道に寄るが1人の女の子が迫ってくる車に固まって動けない。
「ミサッ!!」
咄嗟に女の子の母親が庇って抱き締めるがこのままいけば2人とも轢かれてしまう。
我が子を抱き締め、目を瞑る母親は死を覚悟するがドンッと音がしただけで衝撃がいつまで経ってもこない。
恐る恐る目を開けると目の前で車を片手で止める新星が目に入ってきた。
「ふぅ……間一髪。大丈夫でした?」
冷や汗を拭う新星は親子の安否を確認すると気を取り戻した母親が女感謝の言葉を述べた。
「あ、ありがとうございます!」
「ありがとう!お兄ちゃん!」
女の子も母親に続き、お礼を言った。
新星は少し照れ臭そうにしながら凹ませた車を見る。

車は大きく凹み、煙を上げて動かない。
その状態を見て、やってしまったと思っているとパトカーのサイレン音が聞こえてくる。
「そ、それじゃあ俺はこれで！あと俺がやったってことは誰にも言わないで!!」
「え？あ、あの……」
「それじゃっ!!」
母親が呼び止める前に新星は高く跳躍し、姿を消した。
「あのお兄ちゃん、ヒーローだったのかな？」
「どうでしょうね……」
母親は困惑したなか、そう答えるしかなかった。
新星はこうして時々街で助けが必要な所に現れては人助けを行なっていた。

○

新星の家は少し小高い丘の上にあり、庭が広く豪華な家だった。
新星は制服に付いた汚れがないか再度確認して、何事も無かったかのように落ち着いた様子を作ってから玄関をくぐった。
「ただいまー」

玄関をくぐり、声をかけると奥からモーター音と共に最新型の電動車椅子に座ったラフケルが現れた。
「お帰り、今日は少し遅かったな」
新星の保護者であるラフケルは6年前の事件で足を悪くし、車椅子で生活するしかなくなった。
「おじさん、まぁね。キョーカと少し遊んでたんだ。それよりお腹減ったなぁ。今日は何か、な？」
新星はラフケルにバレないように急いで中に入ろうとするがラフケルが新星の腕を掴んで止めた。
「制服が汚れてるな」
「えーっと、実は不良に襲われて……」
「手を見せろ」
新星は素直に掴まれた手を見せるが、ラフケルは軽く新星を睨む。
「反対の手だ」
新星はしぶしぶと反対の手を見せる。
車を受け止めた手は血は出てないが内出血して、赤くなっている。
「個性を使ったな」

「おじさん、俺の個性は常時発動型だから使ったってのは……」
　関係のない話をしてはぐらかそうとするが睨んでくるラフケルに観念した新星は素直に話した。
「そうだよ、個性を使った。でも人を助けるために使ったんだ。絶対に人は傷つけていない」
「手の傷を見ればわかる。これは殴ってできる傷じゃない。だが、私は個性を使ったことに怒っているんだ」
　非難する目を向けてくるラフケルに新星はたじろいでしまうが、人が危険に晒されているのに放っておけと言われているようで嫌だった。
「でも、個性を使わなきゃ助けられなかった人がいたんだ。自分にどうにかできる力があるのに見て見ぬふりをしろって言うのか？」
「そうは言っていないが今の個性社会で個性の無断使用は罪だ。学生だからと言って、法に則り裁かれる」
「力があるのに何もしないのも罪だろ」
　一歩も引かない様子の新星にラフケルは困った表情になる。
　そこに助け舟に入る人物がいた。
「まぁまぁ2人とも落ち着いて」

「八木さん、来てたんですか」
　骸骨のように痩せ細った顔と体付きの男性が２人の間に入る。
「やぁ、明銀少年久しぶりだね」
「お久しぶりです。今日は何の用で来たんですか？」
「今日は定期診断の日だったんだ。八木、すまなかった。待たせてしまって」
　骸骨のような人物の正体は現日本におけるＮｏ．　１ヒーロー、オールマイト。
　ヒーロー時の周りに希望を与える頼もしい姿とは打って変わって見窄らしい姿だが、これは５年前のある敵との戦いで傷を負ってしまい、このような姿になってしまった。
　それ以来、友人でもあり研究所を経営しているラフケルの元に定期健診に来ている。
　八木がオールマイトであることは新星は知らない。
「いや、いいんだ。それより明銀少年、ラフケルは君を心配して怒っているんだ。個性社会で個性の無断使用は犯罪だ。もし君が罪を犯したら君の夢から遠のいてしまう。ラフケルはそれが心配なんだ」
「それは……わかってますよ」
　少し納得がいっていない表情をする新星にオールマイトは話を続ける。
「ヒーローというのは人を助けて、悪に勝ち、人々に希望を与えるものだ。ヒーローは善だが一歩間違えれば悪にもなる。だから、ヒーローは法に則って活動しているんだ」

ヒーローは個性を行使して人々を助ける。
だが、それは法に則ってるからだ。
法を無視してヒーロー活動をする者達も中にはいるが彼等は『ヴィジランテ』と呼ばれ、ヒーローに追われている身だ。
「……わかりました。ごめん、おじさん」
「いや、わかってくれるなら良いんだ」
ラフケルは新星の肩を軽く叩き、労わる。
「加瀬さんが料理を作ってくれている。先に食べていなさい。私は八木に診断結果を伝えてから食べる」
「なら待ってるよ。家族なんだし一緒に食べた方がいいだろ？」
「……そうだな」
新星の家族という言葉にラフケルは少し口角が上がりそうになるのを我慢して、新星を見送った。

○

ラフケルとオールマイトは家の地下にあるラフケルの研究室に入る。
ラフケルの研究室には様々な検査機器、医療機器が揃えられており万全の状態で検査

を受けられる。
オールマイトは研究室の機材を感心する。
「流石はＳ．Ｓ．Ｌ（特別科学研究所）の社長だ。よくこれだけの機材を揃えたね」
「国から仕事を貰っているからな。個性で犯罪を犯す人間がいる限り、私の生活は安泰だ」
「ＨＡＨＡＨＡ!!ヒーローとしてはその発言は見過ごせないな！」
オールマイトはラフケルの軽いジョークに突っ込む。
ラフケルは特別科学研究所、通称Ｓ．Ｓ．Ｌの社長兼研究所長をしている。
Ｓ．Ｓ．Ｌとは主に個性に関しての研究を行なっており、世界初の個性抑制装置を開発した。
そのおかげで国から発注の依頼が止まらず、大儲けしている。
Ｓ．Ｓ．Ｌはその他にもヒーロースーツ、サポートアイテムの開発、ヒーロー事務所を開設するなど手広くやっている。
ラフケルは空中投影型モニターを展開し、オールマイトに見せながら口を開く。
「単刀直入に言おう。八木、いやオールマイト。このままいけばお前は死んでしまう」
「……」
死ぬと言われて動揺を見せるはずだが、オールマイトは微動だにせず聞く。

「まず君の体だが、もうとっくに限界を過ぎている。内臓をいくつも欠損してあそこまで活動できているのが奇跡だ。胃の摘出で必要な栄養が取れなくなり、体は衰える一方で個性によりマッスルフォームの維持と活動。……個性を使う度に体には大きなダメージが残り蝕んでいく」
「どうすればいい？」
「……一番は引退することだ。まっ、できるわけないと思うが」
「まだ平和の象徴を辞める訳にはいかない」
「そう言うと思ったさ。他にも人造臓器を移植することも考えたが今の君の体が手術に持ち堪えられる可能性が低い」
「……」
　黙り込むオールマイトにラフケル錠剤が大量に入ったケースを渡す。
「取り敢えずはこの薬と栄養価が高い携帯食を渡しておく。本格的なことは後日考えよう。私も資料を探しておく」
「ああ、ありがとう」
「……オールマイト、私はもう友人が死ぬのは見たくない。そろそろ引退してもいいんじゃないか？エンデヴァー、ホークスとお前の後を任せられるヒーローも多くいる。バアル、ＡＦＯは消えた。お前が心配することはない」

「……後継か」
オールマイトはボソッと思い詰めた表情で呟いた。
「何か言ったか？」
「いや、何でもない。私は生涯現役でいるつもりだよ！」
「生涯、ね……」
自分の体を顧みないオールマイトにラフケルは少し呆れた様子だった。
その後、オールマイトは必要な物を貰って帰ったがラフケルは食卓には戻らず、研究室で書類を纏めていた。
作業が終わると虚空に向かって声を出す。
「起きろ、シーラ」
突然薄暗くなり、虚空に人の顔を象ったホログラムが投影される。
『おはようございます。ラフケル博士』
「今日、四丁目の交差点で起きた交通事故における新星がいたという証拠を全て消せ」
『承知しました。現在３１件の情報を捕捉。消去します』
「あの子の存在をバレるにはまだ早い……」
ラフケルは思い詰めた表情でそう呟くのであった。

○

そして月日が流れ、新星達が雄英高校の入学試験に臨む日が訪れた。

3．雄英高校入学試験

広い敷地に聳え立つのはオールマイトやエンデヴァーなどの有名ヒーローを輩出した超有名ヒーロー科高校、雄英高校。

ヒーローを目指す者なら誰もが憧れる学校だ。

その雄英の入学試験に新星と耳郎は挑もうとしていた。

「あー……緊張してきた」

「今更緊張しても仕方ない。全力を出して頑張ろう」

緊張で少し顔色が悪い耳郎の肩を優しく叩いて、励ます新星に耳郎は少しだけ安心するがやはり不安は残ったままだ。

「シンセーはいいじゃん。頭もいいし、強いしさ。頑張れば合格だって間違いないでしょ？」

少しいじけた耳郎はそう憎まれ口を叩いてしまうが、新星は気にした様子はなく、耳郎の真正面に立つ。

「そんなことはないよ。俺だって不安だし、自信もない。だけど俺は夢を諦めたくないから頑張れる」

真剣な目で言う新星に耳郎はこんな所で弱気になっては駄目だと自分を叱咤する。
「それに俺はキョーカがヒーローを目指すって言ってくれたから更に頑張れたんだ。目指すものが一緒な奴がいるだけで俺はできる気がする」
「シンセー……ありがとう。ウチも負けてられないね」
耳郎の不安も晴れ、お互い笑顔を浮かべて見つめ合う。
いい雰囲気だが、忘れてるのか場所は雄英高校の校門前。
しかも、入試日であるため他校の生徒が多く来ている。
そんな中、甘い雰囲気を醸し出していることに2人は気付いておらず、周りの生徒達は2人の様子に顔を赤くしたり、受験のストレスでイライラした様子を見せている。
「……イチャついてんじゃねぇぞこの野郎。俺への当てつけかぁ?」
「!!」
小柄で髪型がブドウのようになっている男子生徒に睨まれながら言われて初めて自分たちの状態に気づき、慌てて離れる。
「きょ、教室に行こう!早く席見つけないといけないし!」
「そ、そうだね!早く行こう!」
2人は顔を真っ赤にさせて俯いて教室へと向かった。

○

筆記試験を終え、残すは実技試験だけとなり受験生は全員大きな講堂に集められ説明を聞くことになった。

実技試験の説明を行うのはプロヒーローであり、雄英高校の教師でもあるプレゼント・マイクが行なってくれる。

『今日は俺のライブにようこそー!!エヴィバディセイヘイ!!』

陽気な彼の性格で説明を行うが試験に真剣になっている受験生達は答える余裕なんてなく、静まり返る。

それでもキャラを変えずに説明を行なうマイクは正しくプロなのだろう。

試験の説明では仮想敵ロボを倒しての点数奪取制で1P、2P、3Pのロボットとギミックで用意された0Pロボットが用意されている。

「実技試験って戦うのか」

「だね。見てよ、ウチとシンセーの試験会場が違う」

「協力させないためだろうな」

1人の受験生がマイクに質問し、何やら別の受験生に注意し終わるとマイクが最後を締めくくる。

『最後にリスナーへ我が校『校訓』をプレゼントしよう。かの英雄ナポレオン・ボナパル

トは言った！「真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者」と！Ｐｌｕｓ　Ｕｌｔｒａ（更に向こうへ）

それでは皆、良い受難を！』

マイクの言葉で受験生は実技試験のする為に講堂を出て行くなか、新星はマイクの言葉を繰り返し思い出していた。

「Ｐｌｕｓ　Ｕｌｔｒａ（更に向こうへ）か……ウルトラ……ね。いい言葉だ」

「シンセー、何してんの？行くよ」

「わかった、すぐ行く」

新星はその言葉を胸に刻んで実技試験に臨む。

○

受験生は各々動きやすい服装になり、それぞれの試験会場の入り口で待機していた。

「試験会場……というより街だな。これ」

受験生の１人がそう呟くように新星達の前にあるのは街を模した試験会場で、受験生達は圧倒される。

『ハイ！スタートォオッ!!』

すると突然マイクのアナウンスが聞こえ、固まる受験生達。

『どうしたぁ!?実戦じゃカウントなんざねえんだよ！走れ走れぇ！賽は投げられているぞ！』

一斉に慌てて駆け出す受験生の中で新星は1人集団を出し抜いて、標的のロボットに向かった。

『標的発見！ブッ殺ース!!』

何故か物騒な事を言うロボット目掛けて拳を振るう。

拳をぶつけられたロボットはひしゃげて派手に破壊された。

「脆いな。これなら楽に倒せる！」

ロボットは受験生用に調整されており、新星には楽な相手だった。

「あともう少しは倒しておきたいけど……」

点数用のロボットを倒していくが中々ロボットを見つけることができずあまり点数を稼げていないと思った時だった。

突然街の奥から爆発音が聞こえ、いくつものビルが倒壊し、ビルより巨大なロボットが現れた。

「アレが０Ｐロボット!?」

「あんなのと戦うなんて無茶だろう！」

到底太刀打ち出来ないとわかった受験生達は我先にと逃げていく。
新星も無駄な戦闘は避けようと逃げようとした時にふと誰かが苦しむ声が聞こえた。
振り向いて後ろを確認するが逃げる者たちばかりで苦しんでいる人はいないが確かに新星の耳は声を聞き取った。
新星は迷いを一切見せず、迫り来る巨大ロボットの足下を目指して走った。

○

迫り来る巨大ロボットの近くで倒壊したビルの中で蹲る1人のカエル似の女子がいた。
「イタタ……深入りしすぎたわね」
カエル似の女子、蛙水　梅雨はビル内にいたロボットを追っている最中に巨大ロボットが現れ、その余波で倒壊しそうなり、同じくビル内にいた人を優先して助け出して自分が逃げるのが遅れてしまった。
天井が崩れて足が下敷きになってしまった。
引っ張り出そうにも痛みと引っかかって身動きが取れない。
するとそこに声が聞こえた方に向かっていた新星が現れた。
「あっ、やっぱりいた。大丈夫か?」

「助けに来てくれたの？ありがとう。だけど貴方も巻き込まれちゃうわ。危険よ」
「試験で死んじゃうなんて嫌だろ。それにヒーローなら人を助ける為に危険な所に飛び込むもんだろ」
心配してくれる蛙水に新星は笑顔で答える。
新星は足を下敷きにしている瓦礫を容易にどかした。
「立てるか？」
「えぇ……っ！無理そうね」
「そうか……」
蛙水に手を貸すが怪我で立ち上がるのも難しいそうで、新星が少し悩むと意を決して蛙水に話しかける。
「もしかしたら嫌かもしれないけど我慢してくれよ？」
「え？……きゃっ！」
戸惑う蛙水に新星は膝裏に腕をかけ、肩を持ち、持ち上げた。
所詮お姫様抱っこと言われるものだ。
「やっぱり嫌だった？」
「い、いえ。突然のことで驚いただけよ」
「そうか、なら逃げよ……」

新星が出口に向かおう振り向いた瞬間、０点ロボットの攻撃で建物が揺れて出口が塞がってしまう。
「ケロ、出られなくなったわね」
「なら……上から」
新星は崩れた天井を見て、呟く。
「しっかり捕まってろよ！」
新星はしゃがんで勢いをつけると天井に空いた穴目掛けて飛び上がる。
建物は半壊しておりもう少し上まで上がれば出られる。
しかし、あと一歩のところで再び強い揺れが２人を襲った。
それに伴い建物が再び崩れ始め、瓦礫が落ちてくる。
「危ない！」
「っ!!」
蛙水が叫んだ瞬間、新星の目に光が走った。
その瞬間、新星の目には周りの物が全て遅くなったように映る。
新星は迫り来る瓦礫に慌てず、深呼吸をし、瓦礫を足場にして出口を目指す。
最後の足場を思いっきり踏み抜いて建物を脱出した。
「ふぅ…間一髪だった」

「ケロ、助かったわ。ありが……後ろ！」
蛙水がお礼を言おうとしたが目の前に０点ロボットが聳え立って、腕を向けていた。
ギョッとして驚いた新星は迫り来る腕から避ける為に蛙水を胸に抱き締める。
向かってきた腕に新星は体を横に晒して、僅かにぶつかったが転がって避けるとすぐ様立ち上がってロボットの体を走り降りた。
「はぁ…はぁ……今のは本当にヤバかった。雄英の試験、半端じゃない」
冷汗を流して新星は呼吸を整えていると、抱き締められていた蛙水が新星の肩を軽く叩いて、話しかける。
「あの、そろそろ離してもらえないかしら」
「え？」
少し顔を赤くして恥ずかしそうする蛙水の顔を見て、次に胸に当たる柔らかい感触に気づいて目を向けると蛙水の胸が新星の胸板に押し潰されていた。
「あっ、いや！ご、ごめん！」
新星は顔を真っ赤にして蛙水を下ろすと慌てて謝った。
「いいのよ。助けて貰ったもの」
「そ、そうか？はは……（柔らかかった……）」
苦笑いで誤魔化しているがちゃっかり胸の感触を思い出している新星だった。

再び轟音が鳴り、振り向くと０点ロボットが暴れている。
それを見て、慌てていた新星は真剣な表情になる。
「あのロボットを止めないと」
「無茶はよした方がいいわ。あんなの私達じゃ止められない」
「だけど止めないと他の人たちが危険な目に合うなら行かないと。俺はヒーローを目指してるんだから」
新星はそう言ってロボットに向かって走った。
ロボットに近づくにつれてその巨大さを再確認する。
しかし、新星は怯えるどころか更に加速して近づいていく。
０点ロボットも近づいてくる新星に気づき、腕を向けてくる。
「デヤッ!!」
掛け声と共にロボットに向かって拳を突き出して跳んだ。
新星の跳躍力は凄まじく、ロボットの体にぶつかっても勢いは止まらず貫いた。
新星はロボットの向こう側に着地し、ロボットの体に穴が空き、火花を散らせて小さな爆発が起こると動かなくなった。
それと同時に試験終了のサイレンが鳴り、試験は終了した。

○

試験が終わり、新星は蛙水の元へと戻り、肩を貸して救護室に向かっていると蛙水が話しかけてきた。

「それにしてもあのロボを止めるなんて凄いわね。貴方なら合格できそう」

「どうかな。あまり点数を稼げてないんだ」

「それなのに私を助けてくれたの？」

「ああ。君が苦しむ声が聞こえたから」

助けたことに何も後悔していない新星の顔を見て、こういう人がヒーローになるべきなんだろうな、と蛙水は思った。

「そう……改めてお礼を言うわ。本当にありがとう」

やがて救護室に着き、蛙水を送り届け帰ろうとするとまた蛙水が声をかけてきた。

「待って、貴方のお名前を聞いてもいいかしら？助けてくれた恩人の名前を覚えておきたいの。それにもしかしたらまた雄英で会うかもしれないし。私の名前は蛙水　梅雨よ」

「俺の名前は明銀　新星。よろしく、蛙水さん」

「梅雨ちゃんと呼んでちょうだい。ケロケロ♪」

２人はお別れを言って、新星は救護室から出た。

するとそこに蛙水を治療しにきた雄英の保健医のリカバリーガールが現れた。
「あの子が明銀の倅かい。大きくなったね」
「ケロ？知っているの？」
「まぁね。さっ、足を見せてみな」
リカバリーガールは少し懐かしそうな顔をしながら蛙水の治療を始めた。

4．ＵＬＴＲＡＭＡＮ　ＳＵＩＴ

試験から数日が経つが、未だに合否結果が届かずヤキモキした気持ちで過ごしていた。

そんなある日、ポストに雄英からの手紙が入っていた。

それに気づいた新星は慌てて、家の中に入り、ラフケルを呼ぶ。

「おじさん！雄英から合格通知が来た！」

ラフケルが来るのを待たずに新星は封筒を開けて中身を取り出すと小さな円盤型のデバイスが入っていた。

「えっ、これだけ？」

「新星、テーブルの上に置いて真ん中を押し込んでみろ」

「う、うん」

戸惑う新星だがラフケルに言われた通りにテーブルに置いて、デバイスの真ん中を押すとデバイスから映像が投影された。

『ＨＡＨＡＨＡＨＡ！何故私が雄英の合否通知を伝えるかって？実は私は今度から雄英の教師として勤めることになってね！　それで合否通知を知らせる役が私になったっ

てわけさ!!』
「おー、オールマイトが教師に……」
（八木の奴、教師なんてのできるのか？）
　Ｎｏ．１ヒーローが教師をすることに新星は純粋驚いたが、ラフケルはオールマイトが教師をできるのか一抹の不安がよぎった。
『それでは結果発表!!明銀　新星、敵ポイント３０Ｐ!!これだけでは不合格だった!!』
　オールマイトの口から不合格と聞いて新星は愕然としてしまう。
　あれだけ耳郎に息巻いて、頑張ると言っていたのに結果がこれだ。
　そして自分の夢に遠退いたことに一番ショックだった。
　落ち込む新星の肩にラフケルが手を置く。
「最後まで聞いてみろ」
『落ち込むのはまだ早いぞ！明銀少年！言っただろう？「これだけでは不合格だった」と！』
　オールマイトの含みのある言葉に新星は顔を上げる。
『試験官が見ていたのはそれだけであらず!!どんな状況でも助けてこそのヒーローさ!!
　偽善上等！我々が見ていたもう一つのポイントこそ救助活動ポイントだ!!君の救助ポイントは３７Ｐ!!合計６７Ｐで合格さ!!!』

「……へ？」
「おめでとう。雄英に合格したな」
合格の言葉に一瞬頭が真っ白になった新星だが徐々に理解してきて、嬉しさが顔から溢れる。
「や、やった……俺やったよ！おじさん！」
「ああ、よかった」
「ハハッ！やった！合格だ！」
椅子から立ち上がって喜ぶ新星を見てラフケルも嬉しそうにする。
「あっ、耳郎にも知らせないと。ちょっと電話掛けてくる！」
新星は喜びながら自室に戻るのを見届けてから、ラフケルは車椅子の腕掛け部分に備え付けてあるデバイスを操作してある所に電話をかける。
「ああ、私だ。開発室の準備をしろ。新星の『ＵＬＴＲＡＭＡＮ　ＳＵＩＴ』を作成するぞ」

○

雄英高校からの合格通知が来た次の日。
新星とラフケルは車で東京へと向かっていた。

「おじさん。これからどこに行くんだ？」
「新星、雄英に合格してお前がまずすることはなんだと思う？」
「え？えーっと……入学に必要な物を揃える？」
「そうだ。そしてヒーロー科だけが用意しないといけない物は？」
　更に質問され新星はラフケルが言いたいことを漸く理解する。
「ヒーロースーツ？」
「そうだ」
「でも、あれって学校側から申請しないといけないんじゃ」
「そんなものは後から私が学校に言えば問題ない。あの学校には多く出資しているからな」
「……」
　S．S．Lは個性に関する多くの機材を開発しており、雄英もその技術にあやかっていた。
　大人の黒い部分を見た気がした新星は開いた口が塞がらなかった。
　やがて2人は大きな施設に着いた。
　そこはS．S．Lの研究施設で個性の研究、様々な機械の開発などを行なっている。
　まるで近未来のような内装に目があっちこっち向いてしまう新星の前をラフケルが

進む。

そしてエレベーターに乗るとラフケルは懐からカードを取り出し、タッチパネルに押し当てると勝手に動き出した。

「私の会社がヒーロー事務所、サポートアイテムを開発しているのは知っているな？」

「うん、まぁ……父さんがいたところだからね」

新星は少し懐かしそうな表情になる。

「今から行く場所はヒーロースーツ、サポートアイテムを主に開発する場所だ」

そう言って着いたのは様々な機械、研究機器が並ぶ部屋だった。

「おー……すごい……」

新星は物珍しそうに何に使うかわからない機械を見る。

すると機械の物陰から突然灰色のショートヘアーの女の子が姿を現した。

「うわっ!?」

「やあやあ！君が新星君だね！私は機構（きこう）リッカという名前なんだ。よろしくね！さて、これから君専用のヒーロースーツを作るわけだけどまず色々と検査しないといけないんだ。あっ、検査って言ってもすぐに終わるから安心してね。血液検査とか長ったらしい検査せずにすぐに終わるから！まずは身長、体重、体格を調べるね！あっ、その前にヒーロースーツに要望とかあるかな!?無ければ私が考えたいんだけど……」

矢継ぎ早に話してくるリッカに新星はたじろぎ、ラフケルは呆れた様子で額に手を当てた。

するとリッカの後ろから背が高い男性が近づいてきて、手に持っていたバインダーでリッカの頭を叩いた。

「落ち着け」

「イタっ!?何するんですか!生目(なまめ)さん!」

背が高く、優しそうな男性は文句を言ってくるリッカに無視して新星に手を差し出し、握手を求めた。

「初めまして、生目 ジュンといいます。主に君の身体検査を受け持つことになったんだ。リッカは身体検査は必要ないと言ったけど、今の時代は身体を知らなきゃアイテムを作れないからね」

「身体検査?」

「うん。君の遺伝子、もとい個性因子を調べて最も適した物を作らないと」

「えー、私の好きな物を作っていいって言われたじゃないですかー」

ジュンの話にリッカは不満そうにするとジュンは呆れた様子でため息をついた。

「はぁ、前それで剣持(けんもち)さんに怒られただろ?」

「うっ……」

リッカは途端に顔を青くした。
突然紹介されて状況がわからない新星にラフケルが説明してくれる。
「この２人が専属でお前専用のヒーロースーツを作ってくれる。年は若いが２人とも優秀なスタッフだ」
「俺のヒーロースーツ……って専属で？」
専属という言葉に驚く新星。
巨大企業が身内とはいえ専属のスタッフを用意するなんて反則も良いところだ。
「そうだ。お前の個性は世界でも希少だ。それを調べるためにもこちらで専属に作らせてもらう。お前のＵＬＴＲＡＭＡＮ　ＳＵＩＴをな」
『ＵＬＴＲＡＭＡＮ　ＳＵＩＴ』という言葉に新星はラフケルの顔を見る。
ラフケルは優しい目で新星を見つめていた。
「お前がヒーローだった父親を目指していることは知っていた。私としてはお前が危険な世界に進んでいくのは反対だ。親友が残した大切な子供で、私の家族でもあるんだからな」
「おじさん……」
「だが、お前はこの前のように人を助けるためなら形振り構わないだろう。だから、せめてお前を守れるスーツを作らせてくれ」

ラフケルの思う気持ちに新星は嬉しくなった。
「ありがとう、おじさん」
「それじゃあ、早速検査から始めよう。生目、後は頼む」
「はい、じゃあこっちに」
新星はジュンに案内され、検査室に向かった。
新星がいなくなるとラフケルは神妙な顔になり、息を大きく吐き思い悩んだ表情になる。
するとリッカがラフケルに近づいてくる。
「今更検査する必要があるんですか?今まで新星さんのこと監視してましたよね?」
リッカはそう言いながらキーボードを操作すると画面に大量の新星が個性を使っているところを盗撮した録画が映し出された。
この前の逃走車から親子を助けた場面やそれ以外のものも映し出されている。
「スーツはこれを元に作っていいんじゃないんですか?」
「個性因子に関しては何も調べていない。どんな作用があるのか、どういった個性なのかを詳細に知らなくてはいけない。そして最も適したスーツを作くるんだ」
ラフケルはそう言って動画を消し、手元のデバイスを操作して空中にある設計図を投影する。

「これって……」
「ああ、新星の父親、明星が使っていたＵＬＴＲＡＭＡＮ　ＳＵＩＴの設計図だ。これを元に作ってくれて構わない」
「やったー！私これを見たくてここに入ったのに中々見せてくれないんですもん！待ち焦がれましたよー！どんな機能付けようかなー？デザインはどうしよう？あっ！カラーリングも決めなきゃ！」
　リッカは興奮した様子で設計図を食い込む程に読み込み、その様子を見て、少し可笑しそうにするラフケルだったが投影されＵＬＴＲＡＭＡＮ
ＳＵＩＴを見て懐かしく思った。

5．波乱万丈な初日

ヒーロースーツの一件から数日が経ち、いよいよ雄英高校の入学式となった。
「準備はできたか？」
「うん。できてるよ」
ラフケルが新星の部屋に入ると雄英高校の制服を着た新星の姿があった。
「様になっているな」
「へへっ、そうかな」
褒めてくれるラフケルに新星は照れてしまう。
玄関まで見送りに来てくれるとお手伝いである加瀬さんがある提案をした。
「あっ！そうだわ。どうせなら写真を撮りましょう。晴れの入学式なんだから」
「いや、写真は……」
「いいですね。おじさん撮ろうよ」
加瀬の提案を断ろうとしたラフケルだったが乗る気の新星を見て、断れなくなった。
「……わかった。撮ろうか」
「よし！」

「それじゃあ2人とも並んでぇ……はい、チーズ！」
2人は並んで写真を撮るとラフケルが新星の肩に手を置く。
「頑張るんだぞ」
「……うん」
ラフケルの応援を受け止めて、新星は雄英へと向かった。

○

最寄りの駅から耳郎と合流して、共に雄英へ向かう。
「合格したって知った時、ウチの親メチャクチャ大騒ぎでさ。近所迷惑で警察と思った」
「ははっ、おじさんとおばさんらしいな」
そんな世間話をしていると自分たちの教室に辿り着く。
教室の扉は優に2メートルは超える扉の前で新星は立ち止まる。
「よし、気合いを入れて行こう。第一印象が大事だからな」
「そんな気を張らなくてもいいんじゃない？変に肩に力入れると失敗しそう」
「そんなことないだろう。同じクラスになるんだから仲良くしようとするはずだ」
そう言って気合いを入れながら扉を開けると目の前に目つきが悪い男子、爆豪と立っていた。

「あっ……」
「あぁ?」
突然のことになると人は動けなくなるが、新星は正しくその状態になっていた。
とりあえず挨拶しようと意識を切り替える。
「え、えーっと」
「どけ、雑魚」
しかし、爆豪はそんな新星を一蹴して肩をぶつけながら、横を通り過ぎていった。
「雑魚って……」
「流石、雄英高校。とんでもない奴もいるね」
初対面で雑魚と呼ばれた新星は驚きで固まってしまい、耳郎は爆豪に皮肉を言って慰めた。
改めて教室に入るとまだ疎らな人数しかおらず、取り敢えず席につこうとすると先日の試験で助けた蛙水が新星たちに話しかけて来た。
「明銀ちゃん。お久しぶりね」
「蛙水さん!合格してたんだ」
「梅雨ちゃんと呼んでちょうだい。貴方も合格できたのね、良かったわ」
新星と蛙水が話していると耳郎が新星の袖を引っ張って誰?と問いかけるように見

てくる。
「あっ、そうだ。梅雨ちゃん、彼女は耳郎　響香。俺と同じ中学で友達なんだ。で、キョーカ。この人は蛙水　梅雨さん、俺と同じ試験会場でそこで知り合ったんだ」
「よろしくね、蛙水さん。」
「よろしくね、耳郎ちゃん。私のことは梅雨ちゃんと呼んで欲しいわ」
「じゃあ、ウチも響香でいいよ」
　その後も蛙水、耳郎、新星の3人で話していると先程新星と一悶着あった爆豪の辺りが騒がしくなった。
「騒がしいなー。さっきシンセーに突っかかった奴じゃん」
「色々な人がいるのね。さっきから明銀ちゃんに殺気が篭った目を向けてくる人もいるもの」
「だよな。俺なんかしたかな……?」
　蛙水が言うように背後で頭にぶどうの実のような髪を生やしている背の小さい男子が明銀を睨んでくる。
　新星はなぜ睨まれるのか分からず、首を傾げる。
　実のところ睨んでくる男子、峰田は試験前の新星と耳郎の様子を知っており、彼女持ちでさらに女に手を出しているのかと一方的な勘違いと恨みを向けているだけなのだ。

すると、突然教室の入り口から声が響いた。
「お友達ごっこがしたいなら余所の学校へ行け。ここはヒーロー科だぞ」
静かな声だが全員に響き、声のする方を向くとモジャモジャ頭の少年、緑谷の後ろに寝袋に包まれたやる気のなさそうな男性が立っていた。
「え？誰？」
「不審者？浮浪者？」
学校に似つかわしくない人物の登場に新星達を始め、全員が驚くが、男性は驚いている生徒達を放っておいて教壇に立つ。
「皆さんの担任の相澤です」
『担任!?』
まさかの担任だったことにさらに驚くが相澤は淡々と事を進める。
「早速だが全員これ着てグラウンドに出ろ」
相澤は寝袋から取り出した雄英の体操服を見せて、指示を出す。
全員が訳も分からず、取り敢えず体操服に着替えてグラウンドに出ると相澤は説明を始める。
「これから体力テストを行う」
その一言に生徒達は動揺を隠せず、相澤にいきなりの体力テストで入学式やガイダン

スはどうなるのか、と疑問をぶつけるが相澤は気にはしない。
「ヒーローになるならそんな悠長な行事なんて時間の無駄だ。雄英は自由な校風が売り文句だ。当然、それは先生側にも適用される。覚えておく事だな」
その一言に生徒達は黙らせられ、相澤は1つのボールを取り出し、首席合格者である爆豪にボール投げを試しでやらせる。
しかも、ただの身体能力を測るのではなく個性を利用した全力での投球だ。
個性使用を許された爆豪はニヒルな笑みを浮かべて、自身の個性である『爆破』を利用した投球を見せる。
「死ねェッ!!」
「中学の頃は公正を期すために個性無しで行うがヒーロー科に入ったなら、まずは自分の限界を知らないといけない」
爆豪が投げたボール遥か遠くまで飛び、その結果は７７６ｍと驚異的な数値となった。
それを見て楽しそうと沸き立つ生徒達を見て、相澤は意地悪い笑みを浮かべて衝撃の言葉を告げた。
「楽しそうか……そんな心持ちでヒーロー科でやっていけると思うか?そうだな、体力テストで最下位の者は除籍処分としよう」

波乱の体力テストの幕開けだった。

○

最初の５０ｍ走の順番を待っていると不安そうな表情をしている耳郎が新星に話しかけてきた。

「はぁ、さっきの話本当かな？」

「さっきって……相澤先生の除籍の話か」

「ウチ、そんなに体力とかないし、不安しかないよ……」

「ここまで来て後悔なんてしたくないだろ？やるなら全力でやって喰らい付こう」

不安そうな耳郎の肩に手をそっと置いて、励ます。

新星の言葉に少しは心が軽くなった耳郎は我ながら単純だなと思いながらも感謝した。

「ありがと、シンセー」

「おう。俺の番だな、行ってくる」

新星がスタートラインに向かうのを耳郎が見送ると背後から声をかけられた。

「ねぇねぇ！耳郎？さんだっけ？」

振り返るとピンクの髪に桃色の肌の女子、芦戸　三奈と服が浮いているように見える

透明の葉隠　透が何故かワクワクした様子で立っていた。
「そうだけど……アンタ達は？」
「私！芦戸　三奈！よろしく！」
「葉隠　透だよ！よろしくね！耳郎さん！」
　同じ女子同士、仲良くなるのはそう問題ではないがそれより芦戸達２人は気になることがあるらしい。
「それでさぁ、耳郎さんと明銀君って付き合ってるの!?」
「……はぁ!?」
　芦戸の唐突な質問に一瞬頭が追いつかなかった耳郎だが、理解すると急に顔を赤くして慌てだした。
「ちょっ、何言ってんの!?」
「だってあんなに親密なんだもの～」
「私見たよ！受験前に耳郎さんとあの男の子が見つめあってたの！」
「あ、アレは違うから！」
「「ほんとうに～？」」
「本当だって！」
「あいつら何騒いでるんだ？」

「さあ？」
　質問責めされて顔を赤くする耳郎とそれを見てニヤつく芦戸達を見て新星と同じく走る尾白は首を傾げた。
　新星の結果は３秒２９と上位に食い込む結果だった。
　その後も体力テストを進めていく新星だが、個性『超人』のおかげで体力テストは余裕の気持ちだった。
　そして、反復横跳びになった時、同じく測定する峰田が新星に話しかけてきた。
「おい、彼女持ちィ……！」
「え、彼女持ちって俺のこと？」
「お前しかいねぇだろうがよ！あんな公然の前でイチャつきやがって！この猥褻野郎め！」
「なんでだろう、お前だけには言われたくない」
　よくわからないことを言う峰田に新星も呆然としてしまう。
　２人は前後に並び、峰田は前に立つ新星を睨む。
（お前にはこの種目だけは負けねぇぞ……！）
　完全な逆恨みを向けてくる峰田に新星は顔は見ていないが視線をヒシヒシと感じていた。

（なんで恨まれてるんだ？）

結果としては峰田は個性を利用して脅威的な結果を出して、ドヤ顔で新星を見てくる。

そんな峰田を見て新星はなんとも言えない気持ちになる。

○

全ての体力テストが終わり、結果として除籍処分は相澤の生徒のやる気を出させる合理的虚偽で全員が呆気に取られていた。

そして帰り道で新星と耳郎は帰り道も同じであるため、一緒に帰っていたのだが、不自然なくらいに耳郎は新星と距離を置いていた。

「どうしたんだよ、キョーカ？」

「な、なんでもない」

耳郎は体力テスト時に芦戸達に言われたことを意識してしまい、新星の隣にいることが気恥ずかしくなってしまった。

「そういやあの背が小さい奴のこと覚えてるか？」

「ああ、あの何故かシンセーを睨んでた奴？」

「うん、そいつにさ。彼女持ちって言われたんだ。どうやら俺とキョーカがそう見えた

らしくて」
「えっ!?」
　芦戸達に続き、他の者達にもそう見られていることに耳郎は驚いた。
「俺らただの友達なのになー」
「そ、そうだね……（なんでだろう。嬉しいような、悔しいような）」
　耳郎は新星の能天気さに安心したが、そこまでハッキリ友達と言われ、少し残念な気持ちになった。

6．戦闘訓練

ヒーローを目指す者達にとって最高峰と言われる雄英高校と言えど、学校は学校。
プロヒーロー達が教師をしてくれるが感想は皆、普通と答えた。
そして、昼休みを挟んで皆が待ち望んでいた授業が始まる。
「わーたーしーがー!!普通にドアから来たー!!!」
ドアを開けて現れたのは現日本のＮｏ．１ヒーローであり、今年から雄英高校の教師となったオールマイトだった。
「やっべー!本物のオールマイトだ!!」
「銀時代のコスチュームだ……!」
「迫力が違い過ぎて画風が……!」
憧れのオールマイトの登場でＩ―Ａの生徒たちは一気に色めき立つ。
「やべぇぞ!明銀!本物のオールマイトだ!」
「お、おう」
つい先日、ある一件で峰田から敵から同志と格上げされた新星は興奮して話しかけてくる峰田の言葉に応えながら、オールマイトを凝視していた。

（父さんと共に戦ったいた……）
「ヒーロー基礎学！ヒーローの素地をつくる為様々な訓練を行う科目だ！そして……今日行なうのはコレ!!」
　オールマイトはＢＡＴＴＬＥと書かれたプラカード手に持って皆に見せる。
「戦闘訓練!!そして戦闘訓練を行う際に着るのがぁ、これだ!!」
　壁が動き出し、中からアタッシュケースが現れる。
　アタッシュケースの中身はそれぞれがサポートアイテム会社に頼んだヒーローコスチュームだ。
　それぞれが各々のコスチュームを手に取って更衣室に向かうが、その中で新星と飯田が困惑して立ち止まっていた。
　それに気づいた耳郎が新星に声をかける。
「新星、どうしたの？」
「いや、俺のコスチュームが無いんだ」
「君もか。俺のも見当たらないんだ」
　困惑する2人にオールマイトが声をかける。
「明銀少年！飯田少年！君たちのコスチュームはこっちだ!!」
「？」

新星と飯田は共に首を傾げた。
オールマイトが先頭に歩くのを新星と飯田は黙って付いて行っていると新星が飯田に話しかけた。
「そういえば、まだ話したことなかったよな。俺は明銀　新星。よろしくな」
「ぼ、俺は飯田　天哉。よろしく頼む」
「飯田のことは結構印象に残っているんだよ。ほら、あの……ツリ目のヤツ、ええっと……」
「爆豪君のことか？」
「そう！爆豪だ。アイツに初日、注意してたからさ」
「最高峰である雄英のヒーロー科で学んでいくんだ。不逞行為は注意しなければいけない！」
（委員長タイプだなぁ）
真剣な顔で語る飯田を見て、新星はそう思った。
そんなことを考えていると新星達は外に出た。
「さぁ！君たちのコスチュームはあそこにあるぞ！」
オールマイトが指差す先には大型トラックとその隣に立つリッカの姿があった。
「おーい！こっちこっち！」

「リッカ？なんでお前がここにいるんだ？」
「なんでって、もちろん君のスーツのためじゃないか！できはしたけど最終調整ができてないからここですることにしたんだ」
　新星とリッカの間に飯田が割って入ってくる。
「お話中申し訳ございませんが！私のコスチュームはどこに!?」
「あっ、ごめんね！えっと飯田　天哉君だよね？飯田さんちのコスチュームはもうできてるよ！」
　リッカはそう言って手に持っていたデバイスを操作するとトラックの側面が開き、白いフルアーマーのコスチュームが出てくる。
「飯田さんのコスチュームは全員ウチで作っているから、すぐにできたよ」
「全員？全員ってどういうことだ？」
「俺の家族は父も兄もヒーローをしているんだ。インゲニウムという名のヒーローは知っているかい？」
「あー、知ってる！」
「インゲニウムは俺の兄なんだ！」
　飯田は自身の兄を誇らしげに語り、新星は一家全員がヒーローということに驚きながら飯田の話を聞く。

オールマイトは親交を深めている2人を止めるのは少し忍びないが、教師としているので彼等に注意する。
「ヘイ！お二人さん！授業のことを忘れていないかい？」
「ハッ！申し訳ございません！只今、準備致します！」
「あ、すいません」
飯田は直角に腰を折って謝るとすぐさまコスチュームを持って更衣室に向かう。
新星はリッカの説明を聞いていく。
「新星くんのスーツは色々と調整しないといけないからここで着替えよう！」
「ここでか……恥ずかしいな」
「ははっ！ここで裸になるわけじゃないから大丈夫だよ。そして、これが君の『ＵＬＴＲＡＭＡＮ　ＳＵＩＴ』だよ！」
トラックの中に鎮座してあった人1人は余裕で入る程の大きさがあるカプセルが開く
「これが……！」

○

少し時間が立ち、生徒達はそれぞれのコスチュームを着て、入試を行なった時に使わ

れた市街地を模した運動場の前に集まっていた。
　オールマイトから本日行なう授業について説明が終わると耳郎が手を挙げた。
「あの、オールマイト先生。シンセーはどうしたんですか？」
「明銀少年は着替えるのに手間取っていてね！もうすぐ来るはずだ。授業の説明については先にしてあるぞ！」
　先程からいない新星を気にしていた耳郎が質問した。
　すると、そこに走ってくる人影が現れた。
「遅れてすいませんでした！」
　全員がその声に振り返る。
　現れたのはコスチュームを着た新星だが、その姿に皆が驚いた。
　それはスーツというよりアーマーだったからだ。
　白銀のアーマーをベースに赤と灰色のパーツが所々にあしらわれている。
「なんだ、そのコスチューム!?」
「コスチュームっていうよりアーマーだな」
「強そー！」
　皆がそれぞれ感想言う中、もっとも食いついたのはどこかオールマイトを意識しているコスチュームを着た緑谷だった。

「そのコスチュームは『ＵＬＴＲＡＭＡＮ』シリーズ!?超人ヒーロー『ウルトラマン』を始めとした色々なヒーロー達のコスチュームの元になったスーツだ！耐久性は勿論、様々な環境化で動けるようにサポート機能が付いている最先端のスーツだよ！Ｓ．Ｓ．Ｌが開発しているけど、その分着用者はＳ．Ｓ．Ｌが決めているって話だよ。今はキャリバーっていうヒーローだけがスーツを着ているはずだけど……」

「お、おう落ち着けよ。てか、誰だっけ?」

突然のマシンガントークに少し引いてしまった新星は引きつった顔をしながら緑谷に話しかける。

「あっ……え、えっとごめん。僕は緑谷　出久って言って、その……」

「ヘイ！今は授業中だぞ！はしゃぎたくなる気持ちはわかるが授業を進めよう！」

オールマイトに注意され、皆もう一度気を引き締める。

オールマイトはその様子を見ながら、新星について考えていた。

（まったく、明星と姿が被ってしまったぜ）

新星の姿にかつての親友を重ねてしまった。

○

屋内での戦闘訓練は二人一組を組んでヒーローチームと、ヴィランチームで行われ

た。
最初にヒーローチーム緑谷・麗日ペアとヴィランチーム爆豪・飯田ペアで行われた。
何か因縁があるのか激しく怒りを表す爆豪に対して緑谷も負けじと応戦するが天才的な戦闘センスを見せる爆豪に緑谷は追い詰められていった。
しかし、結果としては緑谷達の作戦勝ちで終わった。
緑谷は救護室に運ばれ、半壊したビルでは試験が続行できないので別のビルで再開となった。
「そういや授業で言い忘れていたけどさ」
「なに?」
別のビルに移動する際に新星が耳郎に話しかける。
「コスチューム似合ってるよ。カッコイイ」
「そ、そう?ありがと……新星も似合ってるじゃん。フルフェイスで顔見えないけど」
新星に褒められて照れる耳郎は新星のコスチュームも褒める。
「ありがとう。何だかこれを着ると父さんに近づいた気がするんだ」
「……そっか」
どこか嬉しそうにする新星を見て、耳郎も良かったと思った。
「チームが違うから、もし対戦相手になったら容赦しないよ?」

「ああ、望むところだ！」

7．スペシウム

場所を変え、戦闘訓練は再開された。
皆、自身の個性を活かして様々な活躍を見せる中、特に大きな成果を見せたのは特待生の一人である轟だった。
彼は一瞬でビル全体を凍らせてターゲットである模型の核爆弾を確保して、圧倒的な実力を見せつけた。
そして新星の番が来た。
「っしゃあ！頑張っていくか！」
「気合い充分だねー」
気合いを入れる新星にペアである芦戸が話しかける。
「よろしく、芦戸さんだよな？」
「うん！呼び捨てでいいよ！私ね、君に興味があったんだよ。明銀くん！」
「興味？」
「ズバリ！耳郎さんとはどんな関係!?」
新星に向かって指をさす芦戸は声高らかに言った。

突然の質問に新星は呆然としてしまう。
「キョーカとの関係って……ただの幼馴染だけど？」
「本当かなぁ？」
「な、何だよ……」
ニヤつきながら見てくる芦戸に新星は少したじろぐが、すぐに意識を授業に向ける。
「そんなことより！戦闘訓練に集中するぞ」
「後で詳しいこと聞くからね！」
２人はビルの見取り図を広げて作戦を練る。
「対戦相手は八百万と峰田か。峰田もそうだけど八百万が一番厄介そうだな」
「体力テストのとき色んなもの出してたよね。それに頭も良さそうだし！」
芦戸は緑谷たちの対戦時にしっかりとした評価を言っていた八百万を思い出しながら言った。
「創れる制限があるかわからないけど、多分ビル中に罠を仕掛けてくる。それに峰田の個性も合わさると凶悪だな」
「ねぇねぇ！先ずはお互いの個性を教えない？何ができるかお互い分からないよね。アタシの個性は『酸』！酸で溶かしちゃう粘液を体から出せるんだ！」
芦戸はそう言って指先から粘液を出し、地面に垂らすとアスファルトでできた地面が

溶けて、小さな穴が空いた。
「中々の強個性だな」
「ヘッヘッ〜！そうでしょ〜」
「俺の個性は『超人』。力が強かったり、早く走れたりする」
「……あのモジャモジャ君と似た感じ？」
「モジャ……？あぁ、緑谷か。あそこまで強くない。言っちまえば下位互換って奴だな」
お互いの個性を紹介し合い、作戦を考えているとオールマイトから開始の合図が出された。
『戦闘訓練！スタートォォッ!!』
新星達は先ずビルの入口ではなく、ビルの側面に向かった。
「じゃあ作戦通りに。芦戸、頼む」
「ハイハーイ！溶かしちゃうよぉ」
芦戸は手から粘液を出してビルの壁を溶かしていく。
先ず入口付近には罠を仕掛けられていると考えた新星達はビルの側面からの侵入を試みた。
芦戸によって壁は溶かされ、侵入できるようになった。
「じゃあ、早速行こーー！」

「あっ、待て！芦戸！」

芦戸がビル内に足を踏み入れた瞬間、廊下の端に設置された動体検知器が作動し、それに備え付けられていた機関銃のようなものからトリモチ弾が芦戸目掛けて発射された。

ぶつかる寸前に新星が芦戸の襟を掴んで引っ張り、外に引き戻した。

「あ、あっぶなぁ。ありがと、明銀」

「まさか建物中に罠を張り巡らせてとはな。こりゃ上に行くのは難しいかもな」

「一応アタシの個性使えば上に登れるけど……」

「この様子じゃ全部の階に罠は仕掛けられてそうだ」

「うーん……流石特待生の1人。強いなぁ」

対抗策を考えるがどんどん時間が過ぎていく。

「不味いよ～。このままじゃタイムアウトで負けちゃう！」

「……」

早くも新星達は追い込まれてしまった。

○

新星達が八百万特製の罠に対して考えている頃、作った本人である八百万のチームは

ハリボテの核爆弾の部屋で次々とバリケードを張り巡らせていた。
「……」
「峰田さん。核爆弾を中心に半径２ｍ程の所にその頭の物を設置してください」
八百万の個性『創造』により創り出されたバリケードを設置しながら、後方にいる峰田に指示を出す。
しかし、当の峰田は八百万の扇情的過ぎるコスチュームを頭と眼球に焼き付けていた。
（ウッヒョー!!たまんねーぜ、オイ!八百万と同じチームで良かったッ!!）
元々性に対して欲求が素直過ぎる峰田にとって、Ａ組女子のパツパツスーツは目の保養になり、幸運だった。
その中でも一際際どい八百万と同じチームになれたことはさらに幸運だった。
「峰田さん!!聞いていますか!?」
「お、おう!聞いてるぜ!てかさ、下の階にあんなに罠を張り巡らせたのにオイラの個性の出番ってあるか?」
峰田は５分間の僅かな作戦時間で１階に罠を張り巡らせた光景に少し引き気味で見ていたことを思い出しながら話す。
「何事もあらゆる想定をしておくものです。明銀さんの個性は身体能力の増強系の個

性。これに関しては私の罠と峰田さんの個性で足止めできます。問題は芦戸さんの個性のほうですわ。恐らく粘液を出す個性ですがどのような性質があるかわかりません」
「粘液……！」
「……？　故に注視するべきは芦戸さんですわ。そのために万全の準備を整えておきませんと」
八百万の粘液という言葉に反応してしまう峰田を不思議に思ったが話を続ける八百万はバリケードを作り終え、非常食のカロリーメットを食べて、自身の武器を作り出して構える。
「例え授業であろうと手を抜きませんわ！」
（今、おっぱい揺れた！）
気合いを入れる八百万と目が血走る峰田だった。

○

作戦を考えるがいい案が思い浮かばない新星達にオールマイトから放送が入る。
『ヘイ！ヒーローチーム！立ち止まって５分経過だ！残り１０分だぞ！』
「どうしよう!?残り１０分だよ?やっぱり真正面から突撃する!?」
焦り出す芦戸に黙っていた新星が動き出す。

「そうだな。真正面から突撃しよう」
「じゃあ、アタシが酸を出しながら前に立った方がいい？」
「いや、俺が行く」
　新星は芦戸が開けた穴の前に立つ。
「え？でも、明銀の個性じゃさっきの罠に当たらない？」
「避けながら、ぶっ壊せばいい」
「そんなことできるの？さっきの罠結構な数あるかもよ？」
「大丈夫。あれくらいなら避けられると思う」
　新星は両腕をクロスし、以前Ｓ．Ｓ．Ｌで身体検査をした時のラフケルの話を思い出した。

○

「新星、お前の個性『超人』だが身体能力の部分だけがお前の個性じゃない」
「どういうこと？」
「時折、服や靴が壊れることはなかったか？」
「あー、あったなぁ。強度が高い物使ってるのに靴とかよく壊れたなぁ。なんか穴とか燃えたみたいに壊れてた」

「アレはお前の身体機能に耐えきれず、壊れたわけじゃない。別の力が働いて壊れたんだ」
「へ？」
　そこにタブレットを操作しながら生目　ジュンが話に入ってくる。
「君の体にはあるエネルギーがある。それが原因で服や靴が壊れたんだと思う」
「エネルギー……？」
「君のお父さん、明星さんにもそのエネルギーはあった」
「父さんにも？」
「私たちそのエネルギーを『スペシウム』と名付けた。そしてお前のＵＬＴＲＡＭＡＮＳＵＩＴにはそれを活用した武器を付ける。……明星のことをよく見ていたお前ならその武器はわかるだろ？」

○

　腕に備え付けられたアームが展開し、新星はクロスした腕を下に勢いよく広げる。
　すると腕にレーザーが出現し、ブゥゥゥンと重低音を響かせる。
「『スペシウムカッター』、俺の武器だな」
「へぇー」

芦戸は青白く光るレーザーを物珍しそうに眺め、触ろうとすると新星が腕を引っ込めた。
「触ると危ないぞ。鋼鉄を簡単に斬り裂けるみたいだから」
新星は姿勢を低くして、走り出す構えを取る。
「いくぞ」
その一言の後に新星は飛び出す。
罠は現れた新星に反応し、一斉に攻撃を始める。
しかし、新星は迫り来るトリモチ弾を身を翻して避け、罠に一瞬で近づき腕のスペシウムカッターで切り裂いて破壊する。
更に発射されるトリモチ弾を新星は壁や天井に跳び付いて、全て避けて、罠を殴って、蹴って、スペシウムカッターを使って破壊する。
その動きは素早く、スペシウムカッターの光が残像として残り、光の軌跡が出来る程だ。
たった数秒で一階全ての罠を破壊し尽くした新星は芦戸の所まで戻り、一息ついた。
「とりあえず、一階の罠は全部壊した。核を探しに行こうぜ」
声をかけられた芦戸はハッと気づき、新星に詰め寄る。
「何今の動き!・スゴイよ!・本物のヒーローみたい!」

「お、おう、落ち着けよ。時間もあまり無いし、早く行こう」
新星は詰め寄ってくる芦戸にたじろいだが、仕切り直して核爆弾を探しに行った。

○

一方戦闘訓練を見ていたモニター室では新星の動きに皆、驚いていた。
「何だ、今の動き!?」
「本物のヒーローみたい!」
「明銀ちゃん、入試試験の時もあんな動きをしていたわ。改めて見ると凄いわね」
「まーた才能マンか……みんなスゲーなぁ」
A組の1人、上鳴　電気の呟きにオールマイトは内心で考えていた。
(才能? いや、違う。あの動きは長年訓練を積んでできたものだ。新星少年、私は知っているぞ。君はお父さんである明星が死んでから、その背中に追いつこうと努力していたことを)
オールマイトが八木としてラフケルの家に出向いた時、新星が山の中で訓練していたのを見ていた。
山に生えている木を使って縦横無尽に移動する動きを身につけようとしていたのだ。
そして今、その成果が身を結び彼に力を与えている。

○

新星が八百万の罠を破壊し、芦戸は酸で峰田のモギモギを溶かして一気に核爆弾があるであろう場所に着く。

「あそこにだけ入口にバリケードがあるよ」

「あそこにありますって言っているようなもんだ。一気に片付けるぞ」

新星はバリケードを一瞬で破壊し、中に入る。

芦戸が先頭に来ると考えていた八百万は突然現れた新星に驚いて固まってしまう。

「核爆弾発見！」

「え、あ、みょ、明銀さん？」

「げっ!?もう来たのかよ！八百万！どうすんだ!?」

「はっ、はい！迎撃してください！峰田さんの個性なら拘束できるはずです！」

峰田は八百万の指示に従い、モギモギを新星に向かって投げるが新星の背後から芦戸の酸が飛び出し、峰田のモギモギを溶かす。

「させないよ！」

芦戸は続けて床に向かって強酸の液体を広げるとモギモギと共に床を溶かして穴を開ける。

「何を……!?」

自分たちの足場をなくしたことに疑問を感じた八百万だが、そう思った瞬間には新星が核爆弾目掛けて飛び出していた。

「うりゃぁぁぁっ!!」

峰田が新星目掛けて矢鱈滅多に投げてくるのを空中で身を翻して避け、前に立っていた八百万の前に着地する。

「え、あ……」

ヘッドギアの目から光を放ちながら目の前に立つ新星に威圧感を感じ取った八百万は体が固まってしまう。

新星は腕を上げ、八百万に向かって伸ばす。

八百万は咄嗟に目を閉じてしまうが、新星の腕は八百万を通り過ぎ、核爆弾に触れた。

『ヒーローチーム!ウィィィン!!!』

オールマイトからの勝利宣言に新星は安心し、ホッと肩を撫で下ろした。

「終わったな」

「え、ぁ……終わって、しまいましたのね……」

逆に八百万は肩を落として気落ちした様子だった。

こうして新星の初の戦闘訓練はあっさりと終わってしまった。

8．悪意の予兆

新星チームと八百万チームとの戦闘訓練が終わり、ブリーフィングルームで講評が行われた。

「それでは！先の戦闘訓練での講評をしていこうか！今回ＭＶＰだったのは……八百万少女だな！」

「……え？」

先まで何もできずに終わったと思い、気落ちしていた様子の八百万はまさか自分がＭＶＰに選ばれるとは思っておらず、驚いてしまう。

「何故だか分かる人!?」

「はい！オールマイト先生！」

手を挙げたのは飯田だ。

「八百万さんは僅か５分という短い時間で各階に罠を張り巡らし、明銀君達の足止めに成功しました。更に峰田君への指示をこなし、準備を進めていました。結果は負けに終わってしまいましたが、敵という役においては彼女は最善のことしました。逆に勝った明銀君達は序盤で足を止めたことが悪かったことだと思います。長時間その場で足を

止めてしまっており、打開策が思いつかなくても、動くことが最善の行動です。その場で止まるのは敵に狙い撃ちされる可能性があり、危険性が高まります」
「う、うん…そうだな！（また殆ど言われた……）。まぁ、八百万少女も咄嗟に対応できていないところがあったがそれは経験で補える。他の皆も各々の反省点をしっかりと省みて次に活かしていこう!!」
『はい！』
こうして初のヒーロー基礎学は終わった。

○

そして、次の日。
新星と耳郎が共に登校していると校門前で多くのメディア人達がたむろしており、校門を通ることができない状態だった。
「うわ、何アレ？」
「オールマイト目当ての人たちじゃないか？」
その様子を見て、どう校門をを通ろうかと考えていると1人のメディア人が新星たちに気づき、詰め寄ってきた。
「君たち！雄英の生徒たちだよね！オールマイトの様子について聞きたいんだけど!?」

それに続いて、他のメディア人も新星たちに近づいて質問責めをしてくる。
「あの、通して欲しいんですけど……！」
あまりの圧に耳郎と新星はたじたじになる。
このままでは学校に入れないと思った新星は素早く、耳郎の肩を抱き、膝裏に腕を掛けて持ち上げた。
所詮、お姫様抱っこの状態だ。
「えっ、ちょっ……！」
「ごめん！あと、舌噛むなよ！」
新星はその脚力で高く飛び上がり、校門を飛び越えた。
メディア人達からは一瞬で消えてしまったように見えたに違いない。
「っと、何とか抜け出せたな」
「……」
一瞬の出来事で呆然としていた耳郎だが、今の自分の姿を改めて頭の中で整理し始めると途端に顔に熱が集まるのを感じるのと同時に恥ずかしさが湧き出してきた。
「は、早く離せって！」
「あっ、ごめん」
腕を新星の顔に向かって振って、離れると改めて新星の顔を見て更に顔を赤くする。

するとそこに相澤がやって来た。
「朝から何やってんだ。お前ら」
「おはようございます。相澤先生」
「……」
新星は普通に挨拶するが耳郎は顔を赤くし俯いたままだ。
「校内と言えど個性の無断使用は校則違反だぞ」
「いや、あの人達のせいで学校に入れなくて」
新星が校門前でたむろしているメディア陣達を指差し、相澤がそっちに目を向けると溜息をついた。
「はぁ……あの人目当てか。これから先が思いやられる」
オールマイト目当てのメディア陣に相澤はあからさまな疲れた表情をして校門に向かっていく。
「さっさと教室に行け。あっちは俺が何とかする」
そう言って相澤はプレゼント・メディアが先にメディア陣を抑えていたところに向かい、新星は見送った。
「ヒーローになるとあーいう苦労があるんだろうな。なぁキョーカ。キョーカ?」
新星が振り向くと耳郎は校舎に走ってしまっていた。

その後、教室に行っても耳郎は新星と顔を合わせようとしなかった。
「よお、明銀。今日は耳郎と一緒じゃないのかよ?」
新星の前の席である峰田が話しかけてくる。
「よお、峰田。いつも俺と耳郎が一緒みたいな言い方だな」
「違うのかよ?」
「……いや、その通りだな」
ふと思い返すと登校も下校も一緒だったことを思い出した。
そして、耳郎に無視された状態のまま昼休みまで過ぎていき、新星は何とも言えない悶々とした時間を過ごした。
そして、昼休みは蛙水や峰田を誘うタイミングを逃し、1人で昼食を取っており、少し心細い気持ちになっていた。
そして、その時自分が思った以上に耳郎を頼りにしていたことがわかった。
いつも一緒にいてくれたおかげでわからなかったが、こうしていなくなることでわかってしまう。
「ふー……（やっぱり朝のこと気にしてるんだろうな……謝らないと）」
早いうちに謝ろうと決めたとき、耳郎が昼食を乗せたプレートを持って新星が座っていた席にやってきた。

「おっす、ここいい？」
「えっ、あ、う、うん」
　さっきまで無視をしていたのに突然何もなかったかのように話しかけてきた耳郎に新星は戸惑い、そして変に緊張してしまっていた。
「（謝らないと）あのさ、今朝のことなんだけど突然あんなことしてごめん。配慮が足りなかった」
　新星は耳郎に向かって頭を下げる。
　耳郎は頭を下げる新星を黙って見ていると口を開く。
「いや、ウチの方こそごめん。助けて貰ったのに避けるようにな態度しちゃってさ。その……やっぱ恥ずかしくてさ」
　朝のことを思い出して、照れ臭そうに頬を掻く。
「そうだよな。いきなりお姫様抱っこは恥ずかしいよな。なんか段々俺も恥ずかしくなってきたな」
「何それ」
　そう言って新星と耳郎は笑い合った瞬間、学校にサイレンとアナウンスが鳴り響いた。
「なんだ？」

「何かあったんですか？」
「警報システムだよ！それにレベル３って言えば最高レベルの警報さ！今までこんなことなかったのに……」
耳郎が隣に座っていた他学科の生徒に聞くと慌てた様子で教えてくれたが、我先にと食堂の出口に急いだ。
しかし、避難に急ごうとする生徒たちで食堂はパニック状態になってしまった。
「なんかヤバくない？ウチらも行った方が移動した方がいいかな？」
「いや、下手に動くと返って巻き込まれるかも……っ！？」
耳郎に促され立ち上がった瞬間、頸に鋭い悪寒のようなものが走り、頸を手で抑える。
「どうしたの？」
「いや、なんか変な感じが……」
悪寒はすぐに収まった。
その後、食堂にいた飯田のおかげでパニックは収まり、警報も何故か雄英の敷地内に入ってきたマスコミが原因だとわかり、事態は収拾がついた。
そして、クラス委員長が緑谷から飯田に変わったりと色々あったが、新星は食堂で感じた悪寒が気がかりだった。